

□ 合唱

戸ノ下 達也

2022年の文化芸術は、継続する新型コロナウイルス感染症の感染拡大や、ロシアのウクライナ侵略という戦争の現実を見据える一年となった。

新型コロナウイルス感染症の感染者増加に伴い、政府は1月から3月までまん延防止重点措置を継続させ外国人の新規入国も停止したが、7月にオミクロン株への置き換わり等で感染者数が急増した。一方で政府は、9月に「With コロナに向けた政策の考え方」で感染拡大防止と社会経済活動の両立を推進する方針を示した。これら政府の方針が、文化芸術にも影響を与えた一年だった。その影響として、外国人演奏家の来日の制約、感染者発生による公演中止のほか、ディスタンス確保に伴うステージ上の歌唱人数制限で、演目の限定や、アマチュア合唱団の演奏機会喪失が顕在化した。コロナ禍以前は、オーケストラ併設合唱団や栗友会合唱団などが、オケと協業し素晴らしい演奏を聴かせてくれた。しかしこの制限のため、2022年も新国立劇場合唱団などの職業合唱団が主たる役割を担う状況が継続したが、次第に従前のスタイルが戻りつつある光明が見出せた。

現在の合唱のメルクマールは、クラシック音楽公演運営推進協議会（クラ協）や一般社団法人全日本合唱連盟（JCA）が、2020年実施の検証実験により内閣官房と文化庁の承認で発表した「ガイドライン」である。クラ協のガイドラインは、5月16日付改訂の後、10月7日付で大幅に改訂、JCAのガイドラインは1月に更新され、状況に応じた見直しが続いた。このガイドラインが、劇場・ホールや社会教育施設のガイドラインと連動して合唱の再開と継続の礎となっている。

合唱演奏は、感染拡大が継続する中でも、公演やイベント等が「再興」しつつある。

まず職業合唱団の活動である。東京混声合唱団は、1月に第257回定期（指揮・高関健）、3月に第258回定期（指揮・大井剛史）、5月にコンクール課題曲による「コン・コン・コンサート」（指揮・水戸博之）、7月に「東京混声合唱団&新国立劇場合唱団合同演奏会」（指揮・三澤洋史、キハラ良尚）、9月に「東混オールスターズ〜田中信昭と共に〜」、11月に第259回定期（指揮・沖澤のどか）、12月に大阪定期No.27（指揮・大友直人）を開催した。また「合唱の輪」シリーズは、4月「相澤直人の世界」、5月「松下耕の世界」、7月「上田真樹の世界」が開催された。委嘱新作は、信長貴富、木下牧子、土田英介、三枝成彰に委嘱初演された。特に東混&新国合唱団合同演奏会は、かつての日本プロ合唱団連合を彷彿させる崇高な演奏会だったことは強調したい。

室内合唱団日唱は、6月に第34回（指揮・白井智朗）、8月に第35回（指揮・北原幸男）、10月に第36回（指揮・山崎滋）、12月に第37回（指揮・中館伸一）の定期公演を開催した。

神戸市混声合唱団は、3月に春の定演「春へのあこがれ」（指揮・松村努）、4月に「合唱コンクール課題曲コンサート」（指揮・佐藤正浩）、9月に秋の定演「松下耕の世界」（指揮・松下耕）、地域密着型の「文化センターコンサート」を4回、「こどもコンサート」を2回開催したほか、神戸市室内管弦楽団と合同で1月に「ニューイヤーコンサート」、11月に「プーランク讃

（指揮・佐藤正浩）を開催した。

びわこホール声楽アンサンブルは、3月に第74回定期と第2回米原公演「フォーレ作曲レクイエム」（指揮・園田隆一郎）、9月に第75回定期と東京公演vol.12「音楽史の小径〜イタリア古典歌曲から辿る〜」（指揮・本山秀毅）、11月に第76回定期「ブッチーニ作曲『ジャンニ・スキッキ』」（指揮・大川修司）の公演ほか、5月の「近江の春びわ湖クラシック音楽祭」で「オペラ合唱名曲選」（ピアノ・河原忠之）を、また12月に「美しい日本の歌」（指揮・本山秀毅）も開催した。

若手作曲家の委嘱初演に注力しているヴォクスマーナは、3月の第47回定期で鈴木純明と鈴木治行、9月の第48回定期で椎葉ふう香と川島素晴、アンコールピースは伊左治直の委嘱新作を初演した。

さらに、例えば東混は「文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）」で北海道や東北で8カ所、神戸市混声は、神戸市の小学校アウトリーチ事業で、低学年32校、高学年31校を訪問した。音楽を身近で体感するアウトリーチは、コロナ禍にあっても文化芸術に接する機会創出として評価すべき取り組みである。

オーケストラ演奏会では、「交響曲第2番・復活」（京響、九響、名フィル）と、「交響曲第3番」（東フィル、京響、東京の春祭合唱の芸術シリーズ）というマラー作品が目を引く。また、4月に奈良フィルがモーツァルト「戴冠ミサ曲」、5月に東響がウォルトン「ベルシャザールの饗宴」、7月に関西フィルがシューベルト「ミサ曲第6番」、8月に草津夏期国際音楽フェスティバルでサン＝サーンス「レクイエム」、10月に群響がベートーヴェン「荘厳ミサ曲」、札幌がハイドン「戦時のミサ」、11月に静響がハイドン「天地創造」を演奏した。職業合唱団との協演は、3月に東響がラヴェル「ダフニスとクロエ」、9月にN響がヴェルディ「レクイエム」、都響がヤナーチェク「グラゴル・ミサ」、詔響がブラームス「ドイツ・レクイエム」を新国立劇場合唱団と、7月に新日フィルがオルフ「カルミナ・ブラーナ」を東京二期会合唱団等と演奏した。パッサ・コレギウム・ジャパンも第146〜152回定期でパッサ、ハイドン、モーツァルトを取上げた。年末の第九公演や藝大メサイアも復活し、意欲的な合唱とオーケストラの協業が「再興」したことは記憶しておきたい。

合唱による音楽文化振興の観点では、JCAや一般社団法人日本合唱指揮者協会（JCDA）、一般社団法人音楽樹、一般社団法人東京国際合唱機構（ICOT）のセミナーや講座、コンクール、コンサートなどの取組みも見逃せない。

JCAは、7月に第35回「おかあさんカンタートin鹿児島」、8月に3年ぶり開催となる「おかあさんコーラス全国大会」を東京都で、第75回「全日本合唱コンクール」は、10月に青森市で中学校・高等学校部門、11月に津市で大学職場一般部門を開催した。JCDAは、5月から「名演紹介シリーズ」配信、6月に「JCDA合唱の祭典2022〜第22回北とびあ合唱フェスティバル〜」を開催した。音楽樹は、「春のアトリエ」配信、GWに「Tokyo Cantat」のコンサート2公演、8月に3年ぶりの「八ヶ岳ミュージックセミナー」を南聡と五十嵐琴未をゲストに、11月に「コロ・フェスタ2022inたけた〜岡城に集う〜」を開催した。ICOTは、7月に「東京国際合唱コンクール」、8月に2年ぶりに「軽井沢国際合唱フェスティバル」「第8回東京国際合唱作曲コンクール」を開催した。各組織独自の合唱文化を深耕する取組みの再開は、特筆される。

2022年の合唱界は、コロナ禍で中断や制約を余儀なくされた関係者の必死の尽力と連携で「再興」のきっかけを掴み、実践した一年と言えるだろう。